

## 北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会(第4回)の開催結果

1 日 時 平成29年6月7日(水) 14:00～15:00

2 場 所 北海道庁赤れんが庁舎1階 5号会議室

3 出席者

(1) 構成員

白井 栄三氏((国)北海道教育大学岩見沢校)

戎谷 侑男氏((株)シーピーツアーズ)

中田 美知子氏((学)札幌大学)

西 吉 樹氏((一財)北海道歴史文化財団)

西山 徳明氏((国)北海道大学観光学高等研究センター)

山崎 幹根氏((国)北海道大学大学院法学研究科・法学部)

(2) 道側

小玉環境生活部長、甲谷文化・スポーツ局長、高見文化振興課長 ほか

4 議 題

(1) これまでの意見の整理について

(2) その他

5 概要

第1回～第3回の北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会の意見整理の内容を説明したあと、意見交換を実施した。

【主な意見】

別紙「第4回北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会意見概要」のとおり

## 第4回 北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会 意見概要

### 【意見】

- 周辺エリアの現状と課題に記載する「事業の位置づけについて、観光に有効だからというところで考えるのか、もっと本質的に、北海道の財産として、守っていかねばならないというところに力点を置くのかで、組み立てが違ってくる。」に関し、観光に有効だけでは難しいと感じている。北海道の財産、文化として、どう守って行くのか、そのための過程で観光に有効であるということとを並列ではなくて、文化を守るということの方法論や戦略の一つとして、観光が有効であると考えべきである。
- 百年記念塔の今後の方向性に記載する「これから50年、80年残せるか考えるとかなり厳しい。150年の年に作業現場を見学可能とした解体をし、2万本程度の桜の植樹をして、縦の100mから横に100mといった垂直なものから水平に、桜の名所にしても良いのではないか。」について、当初は、モニュメントとして残すことも考えたが、将来的な維持管理費用の負担を踏まえ、解体の方向性を考えた。  
解体後の跡地については、環境保全活動や誘客のため、桜の木や花などを植樹するほか、公園内にアイヌ文化や縄文遺跡を模擬的に作るなどの方向性も考えた。また、百年記念塔の解体材を利用し、小型のモニュメントを作るなど百年記念塔を何らかの形で残していくことが必要である。
- 北海道博物館と開拓の村の年間利用者数の合計は約30万人であるが、大都市に隣接している割には少ないと感じる。白老町に開設する民族象徴共生空間の2020年の年間利用者数の目標は100万人だと聞いており、そういった面では、交通アクセスの向上は、百年記念施設を活性化させる道筋になるので、道として議論をしてもらいたいと思う。
- 各施設について、北海道博物館は、北海道の中核的博物館、最高峰の博物館としてどうあるべきかという明確なビジョン（意志）を持っており、考える主体ははっきりしている。これに対して、開拓の村は、指定管理者がかなり限定された中で、オペレーションを任されており、ビジョンをもって開拓の村をどうするかということを考える立場が与えられていないように見える。
- 百年記念塔を解体する場合は、道民から意見をしっかりと聞くプロセスを経ないといけないと考える。将来の北海道の子供たちが、この100年、150年の事業を教科書で学ぶことになる。今、住んでいる人たちが納得する整理が必要だと考えている。ただ、安易に、「費用がないことを理由に解体します。」では、納得されないと思う。
- 道は、開拓の村や百年記念塔について、今回の議論を機に、大きな判断をしない限り、一見、維持する決断をしているように見えるけれども、実は、見放している、無くなる、壊れるということを示認しているしかない。博物館はまだしも、開拓の村や百年記念塔にかかるコストを今後も負担し続けることについて、道民の理解を得るのは難しいと思う。もう一つの考えられるプロセスとして、あの空間の活用について、民間の知恵を借りることが必要。場所、広さ、遺産群、価値、しかもそのほとんどが文化財に指定されていない希少な条件をもとに、活用の仕方を世の中に問うてみる必要があると思う。百年記念塔のあり方を議論するためには、一方向ではなく、何通りかのプロセスをまず、経る必要があると考える。百年記念施設は、それに値する素晴らしい資産であり、環境であると考えている。

- 周辺エリアの今後の方向性に記載する「PFI事業で事業募集をして、リノベーションとオペレーションを任せる。記念塔、開拓の村、博物館を一つひとつ切り離して考えてもうまくいかない。セットで考えて、150年を契機とした大文化事業、北海道の文化観光という新しいステージを切り拓くようなことをやれば、日本中から応募があるかもしれない。」に関し、これからの日本は、明らかに大きな政府から小さな政府に転換して行く中で、民間の力を信じてやって行くしかない。このPFIやPPPにより民間発案を徹底的にうまく利用するというか、まさに民間協働により、一緒に考えるとかなりおもしろい話が集まると思う。
- 百年記念施設の各施設は、一つのグループ、ゾーンとして捉えていく必要がある。博物館や開拓の村は、それぞれ良さがあるが、それに比べ、百年記念塔は、あまり意識されていない気がして残念である。百年記念塔が注目されるべくことを考える必要がある。
- 民間から資金を募ることも大事であるが、一方では、このような時代だからこそ、一般会計からきちっと予算を確保するための論拠、理論武装を検討するなど、現状と課題に対し、正面から向き合う姿勢も必要であることを、あえて申し上げる。北海道150年は、博物館や開拓の村、百年記念塔が注目される大きなチャンスであるので、民間との連携や市民協働、市町村の連携、若手職員の研究会などの取り組みは、ものすごく大事だと思う。そういったものが大事だと踏まえた上で、この施設を活かすために、真正面から、論拠や理論武装を検討するという取り組みが必要なのだろうと改めて思う。
- 観光に有効であることと、文化財を守ることにについて、両方やるべきだと思う。観光施設としての魅力を増やしていく余地については、まだまだ、伸びしろがあると思うし、他方で、文化的な価値をちゃんと発信するところも当然やって行くべきである。量と質が両立することが困難であれば、課題について議論を進めたり、質を高める工夫を検討したりすることが必要となる。具体的に無い袖は振れませんとの理屈は、理解できるけれども、あえてそうした方向性を議論するのであれば、北海道の歴史文化の価値は、やはり大事であるということをもっと前面に打ち出していくというところで、議論ができれば良いと改めて思ったところ。
- 開拓の村の建造物群の価値というものが、普通、文化財に焦点が置かれると考える。しかし、価値があったら文化財にならなければいけないのかというところで、むしろ、今の文化財行政というものの中で、一般的なあり方について協議して、本当の文化財の残し方というのは、文化財に指定しなくたって、道として自立して価値を評価できると考えている。その価値をきちっとガイドラインに組み込みながら、民間事業者に活用を促す、要するに新しい文化財のコンセプトにチャレンジする。
- 幸いにしてというか、開拓の村という別の枠組みの中に維持されているが故に、文化財指定というものを受けていない、これを逆手にとったときに、その価値を高める形の活用について新しい文化財の取り組みができると思う。それは、今、日本中の課題で、日本中でいま、そのテーマで動いている。
- 開拓の村は北海道の大きな財産だと思う。今までと違って、活用するんだと言う切り口で、進めることも大事。もっと私たち道民も、あそこを活用できないかを考えることが必要。
- 訪れる観光客に納得させてお金を払わせることが、最大の寄附行為。そういう意味では、観光は、ポテンシャルを持っているし、うまく利用すると、本当に必要なお金を受益者負担として集めることができる。施設の維持に寄附を持ち込むと、文化庁と同じ議論になる。過去10数年と比べ、観光は変わって来ており、その価値をどう使っていくかを考えていけば、観光と百年記念施設は、セットになる。
- 価値を国とか外から感じて貰うのではなく、むしろ、自分たちが価値を守るなどの、意識とか、意志みたいなものが増えれば、価値は、文化財になることでは

なく、むしろ、地域が決めていく、地域が価値を作る、そういう方向がでると、未来が見える気がする。

- 仮に百年記念塔を解体した場合に、イベントでも良いと思うが、塔を光で再現する取り組みも良いと思う。
- 全体をゾーンとして考えた時に必要なのが、互いの連携意識である。これが高まらないと、ゾーンとしての管理は困難だと思う。どうすれば、百年記念施設をリードしている北海道博物館が、ほかの施設と連携できるのか、そこをトライしていくと、もう少し先が見えると思う。
- 位置的に一体ではあるけれど、実態としての3つの施設が完全に一つの施設となるような取り組み方は大事だと思う。